

カゴの中の鳥

和乃 璃瑚

――今日は何にしようか。

静子は店内をうろつきながら考えた。

ひとくちにスーパーと言っても、店の特性も違えば体制も違う。じっくり観察した上で行動に移さなければ、とんでもないことになる。静子は献立を考えるかのように、さりげなく店内をぶらつき、標的を定めた。

特売の商品をスーパーのカゴに入れ、その隣の商品を自分の鞆にすべりこませる。手馴れた動作だが、周りを確認することは怠らない。

――大丈夫。今日もうまくいった。

支払いを済ませて外に出ると、うんざりするような暑さだったが、静子は太陽を見上げて微笑み、さっそうと歩き出した。



あの頃は静子にとって地獄だった。

短大を卒業してすぐに、親の勧めで見合いをし、出会ったのが今の夫だ。頭が少し寂しいものの、それ以外のルックスは抜群だったし、服のセンスもよかった。話題も豊富で楽しかったし、歳が10も上なので包容力もあった。おまけに大金持ちの次男坊ときたら、静子には断る理由がなかった。

トントン拍子に事は進み、出会って1年半で結婚式を挙げることになった。

友人たちは皆、羨ましがっていたし、静子も最高のパートナーを見つけることができたと思っていた。

しかし、それが静子にとって、地獄の始まりだったのだ。

都内の一等地に大きな一戸建てを購入し、2人の新婚生活は始まった。若い人同士のような生活とは違ったが、逆に『奥様』という感じがして、静子は気に入っていた。

料理や掃除などの家事は、通いの家政婦がしてくれるので、静子はいつでも好きなことをできた。庭に植えた花の手入れをしたり、気が向いた時だけ料理をしたりして過ごした。欲しいものは何でも買えたとし、誰から見ても幸せなはずだった。

しかし静子は、次第にとてつもなく孤独を感じるようになった。

穏やかで何不自由のない生活、それは裏を返せば単調で変化のない生活だった。家にいることの好きな夫とは外に出掛けることもなく、友人たちは世界が違ってしまった静子に対して、距離を置くようになっていた。

子供でもいれば、少しはましだったのかもしれないが、2人には子供もいなかったもので、新しい知り合いができることもなかった。

時々静子は、まるでこの世の中から自分という存在がなくなってしまったような気になった。
――私はここにいる！ ここにいるのに……

ある日、静子は思い切って夫に言ってみた。

「私、どこかパートにでも出ようかしら」

すると夫はびっくりしたように言った。

「どうして？ 暮らしていくのに充分なお金はあるだろう？」

「もちろん、それは充分すぎるほどあるわ」

「だったらパートなんかしなくてもいいじゃないか」

「ええ……。でも特に何もせずにのんびり過ごしてるなんて、申し訳ない気がして……」

「そんなこと、静子が気にすることないよ。それとも誰かに何か言われたりしたのかい？」

「ううん。そういうわけじゃないんだけど」

「だったら大丈夫だよ。ま、そういうところにまで気を遣うのは、静子のいいところではあるんだけどね」

夫は優しく言って笑った。静子はそんな夫の笑顔をととても愛していた。けれど今日は、その笑顔が憎らしかった。

本当は『家にずっと居てもつまらない』と言いたかったのだが、こんなにいい暮らしをさせてくれている夫に対して、そんなことを言うのは気が引けただけなのだ。

——この人は何も分かってない。夫婦円満で、経済的にも充分な生活ができていれば幸せとは限らないのに……。私の気持ちなんて、誰も分かってくれないんだわ！

そんな時だ。

静子は気晴らしにと出掛けたデパートで、万引きを目撃した。その人は万引きなんてしそうにない人だったので、静子はびっくりしすぎて店員に告げることができなかった。それどころか、何かに引っ張られるようにして、その人の後をつけていた。

その人は平然と店内を歩き回り、店を出た。そして、微笑んだ。静子は訳が分からず、ただ立ち尽くしていた。

翌日、静子は隣町のスーパーに出掛けた。

昨日のあの人の微笑みはいったい何だったのか、それを知りたかった。

何をどうすればいいのか、静子には見当もつかなかった。周りを見回すと、誰もがこっそりと自分を見ているような気がしてくる。静子は頭が真っ白になって、とにかく目に付いたものを鞆に放り込んだ。

いつ店員に声を掛けられるかとビクビクしながら店を出ようとした時、

「お客様、失礼ですが……」

と、肩を叩かれて、静子は思わず目をつぶった。

——やっぱり！ やっぱりこんなこと、するんじゃないかった！ どんな言い訳しよう。夫には内緒にしておいてくれるかしら。まさか私、逮捕される？ まさかね。でもそんなことになったら……

「お客様？　どうかされましたか？」

静子が仕方なく振り返ると、素晴らしい営業スマイルの店員がそこにいた。

「このハンカチ、お客様が落とされたのではないですか？」

「はっ？」

よく見ると確かにそうだ。手に握り締めていたはずのハンカチが、いつの間にかなくなっていた。そんなことにも気付かないくらい、静子はビクビクしていたのだ。

静子は慌ててハンカチを受け取り、そそくさと店を出た。

どうやって家まで帰ったのか、とにかく1時間後には静子は自宅のリビングにいた。目の前にあるものは、まぎれもなく、静子が万引きをしたものだ。

静子はしばらくそれを見つめていたが、やがて大きな息をつき、つぶやいた。

「これだわ」

その日以来、静子の万引きはエスカレートしていった。回数を重ねるごとに度胸はつき、手際もよくなった。

あの時微笑んでいた人の気持ちが、今なら静子にもよく分かる。

――きっとあの人も自分の存在を確認したかったのよ。私はここにいるって。

万引きをした後、いつも静子はすがすがしい気分だった。孤独を感じてイライラしていた時とは違い、周りの人に優しくできた。静子はまた幸せを感じていた。

しかしそれも、夫のあるひと言で終わりになった。

「最近、この辺のスーパーで万引きが多いらしいよ」

朝食をとりながら夫が言った時、静子は心の中でほくそ笑んだ。

――ほら、万引きをすれば、こうやって人の話題にのぼることができるのよ。

静子は内心の喜びを悟られないようにしながら、夫に聞き返した。

「そうなの？　そういうのって、どんな人がするのかしら。きっといろんな人がいるんでしょうね」

「そうかな？　万引きする人なんて、皆同じだろ」

夫は、それ以上話す価値もないというように、

「ごちそうさま」

と、湯飲みを置いて、席を立ってしまった。

静子は愕然とした。

――万引きでは足りなかったのか！　もっと注目されるような何かがないといけないんだわ。たかが万引きでは、人の関心をひくことはできない！

自分の考えが間違った方向に進んでいることに、静子はまったく気付いていなかった。

穏やかな朝の時間とは対照的に、静子は明らかに破滅へと向かっていた。

1ヶ月が経った。

あれから静子は万引きをしていない。と言っても、自分の間違いに気付いたわけではない。ただ物足りなくなったのだ。世間の注目を集めるようなことをする、それが今の静子の目標だった。これが普通の人なら、ボランティアや仕事などに目がいくところだが、静子は違っていた。

あの朝の夫のひと言で、静子の中のブレーキが壊れたのだ。あれ以来、静子は考え続けていた。何をすれば世間が注目するのか。

――私のすることに誰もが関心を持たなければ意味がない。世間の人達が、私のしたことをあちこちで話題にする。何をすればそうなるのか……。

考えながらぼんやり窓の外を見ていると、近所に住む奥さんたちが子供の手を引き、楽しそうにおしゃべりしながら歩いている。

――なんて憎らしい。私はこんなに辛い思いをしているというのに、あの人達はある程度楽しそうにしている。子供がいるという理由だけで友達ができている。

そう思った時、静子の頭にあることがひらめいた。

「そうよ！ 子供よ！ 世の中で1番おしゃべりなのは女、そして女たちが1番関心があるのは子供のこと。それなら子供を巻き込んだ何かを起こせば、きっとそこらじゅうで話題になるはずだわ！」

静子は1人で手を叩きながら飛び跳ねた。

こうしてはいられないとばかりに、メモ用紙とボールペンを取ってきて、ソファに座った。途端にまた立ち上がり、とっておきのロイヤルミルクティを入れて、昨晚夫が買ってきてくれたケーキも持ってきた。

「まずは……、何をやるかよね。誘拐はダメ。公表されないことが多いから意味がないわ。殺人は？ ダメダメ、そんなのすぐに忘れられちゃう。もっと長期間で、誰がターゲットになるかも分からないもので、できれば万引きの技術が生かせるもの……」

静子は考えながら、ロイヤルミルクティに口をつけた。夫が誕生日に買ってくれた、一番お気に入りウェッジウッドのカップだ。それとセットになった皿にのっているケーキに手を伸ばした時、静子は思いついた。

静かに微笑んだ静子は、ゆっくりとケーキを口に運んだ。



「どうしたんだい？ 今日はやけにご機嫌じゃないか。何かいいことでもあったの？」
帰宅した夫の晩酌に付き合っていると、夫が聞いた。

「え？ ううん、そんなことはないけど。強いて言えば、テレビの星占いがよかったってことぐらいかしら」

静子はさりげなくごまかしたが、内心ヒヤリとした。

——そういえば昼間、家政婦も言ってたわね。変に思われぬように気をつけなきゃ。

「ひどいことをする奴もいるもんだな～」

テレビをつけた夫が、ニュースを見ながら言った。静子も画面に眼をやると、このところ連続して起きている事件だった。

「お菓子を針を入れるなんて、何を考えているんだろう。それもあちこちのスーパーでなんてさ」

「そうねえ、子供を狙ってるのかしら」

「たぶんそうだろうな。大人も食べるようなお菓子じゃなくて、子供に大人気のキャラクターのお菓子だから」

「お母さんたちは心配でしょうね。私たちは子供がいないから安心だけど……」

「だけどお菓子の売れ行きもガタ落ちだろうな。スーパーも困ってるんじゃないか」

「それがそうでもないみたいなの。昼間テレビでやってたんだけど、1軒で起こるのは、ほんの2～3個だけらしいのよ。しかもそれが同じお店では繰り返されないもんだから、1回あったら皆、逆に安心しちゃうらしいわよ。だから売り上げもほとんど落ちてないんですって」

「へえ、そんなもんなのかな。なんか変な感じだな」

「私が母親だったら、やっぱり怖いと思うんだけどね」

——我ながら素晴らしい演技だわ。女優にでもなろうかしら。

静子は満足げに微笑んだ。

あの日、静子が思いついた計画はこうだった。

子供に人気のあるお菓子だけを狙い、細い針を商品の中に入れ込む。こっそり商品を触るのは、万引きの時で慣れたものだ。簡単にできるはずだ。ただし、1度にたくさんやってしまうと、母親たちはお菓子を買うことをやめてしまうだろう。だから少しずつ、広範囲に渡ってやる必要がある。誰でもそんな問題が自分の身に降りかかるとは思いたくないから、1回あったらもうないと思わせるように、1回やった店ではもうやらない。そしてしばらく間をあげ、完全に世間が安心しきったところで、もう1度、今度は一気にやるのだ。そうすればきっと、世間は混乱する。それを想像しただけで、静子は笑いが止まらなかった。

それから1週間ほどかけてお菓子売り場をリサーチした静子は、人気キャラクターのおまけがついた、いわゆる食玩と言われるお菓子が、異常なほどの人気であることを知った。

おまけには色々なタイプがあり、それをすべて集めて友達に自慢するために、子供たちは何回もそのお菓子を母親にねだり、おまけを集めることに必死になっていた。

ターゲットは決まった。



最初の報道から、そろそろ1ヶ月が経とうとしている。

世間の母親たちは、初めは口々にその話をしていたが、今ではもうその事件がなかったかのように、どうでもいい話に花を咲かせている。それもそのはず、ここ数日は何の報道もされていないのだ。

静子は待っていた。世間が事件を忘れ、安心してしまおうのを。

そして遂に、その時がやってきたのだ。

静子はまるで重大な任務を遂行するような気分で、背筋を伸ばした。

——いよいよ明日は最終ミッションね。今度は大量に針入りお菓子をばらまいてやるわ。そうすれば、この前よりもっともっと世間は騒ぐはず。

そう考えると、静子はワクワクしてなかなか眠ることができなかった。

翌朝、まだ薄暗いうちから静子は起きだした。

夫のために、いつもより時間をかけて朝食を作った。今日はとても気分がよかった。

顔を洗ってダイニングに入ってきた夫は、テーブルの上にところ狭しと並んだ、手の込んだ料理に目を丸くした。

「どうしたんだい？　こんなにたくさん」

「今日は早く目が覚めちゃって、せっかくだからと思って、いつもより手をかけてみたの。でもちょっと作りすぎちゃったわね」

夫は、静子が大好きな笑顔で言った。

「でもどれもおいしそうだ。よし、今朝は倒れるまで食べるぞ！」

「あなた、それじゃ会社に行けなくなっちゃうわよ」

2人は笑い合い、さっそく朝食に取りかかった。

静子は最高に幸せな気分だった。今日の『最終ミッション』が成功すれば、この幸せが永遠に続くと思っていた。

この1ヶ月、静子はどのスーパーが、例のお菓子の売り上げが1番いいかを調べていた。1番売れる店で『最終ミッション』を決行するのがもっとも効果的だからだ。

そして今、売り上げが第1位に輝いたスーパーに、静子は来ている。

買い物カゴを持って店内をまわる。怪しまれないように、いくつかの商品をカゴの中に入れ、お菓子売り場にやってきた。

さりげなく辺りを見回す。何となく、周囲の空気が違うような気がして、静子は動きを止めた。頭の中で何かがざわついている。けれど、どれだけ注意深く見ても、特に変わったところはないようだった。

静子は鞆からすばやく針を出し、次々とお菓子の中に入れ込んでいった。持ってきた針がなくなると、すぐにレジに向かい、カゴの商品の支払いを済ませて店を出た。



その映像を目にした時、静子は自宅のリビングでくつろいでいた。

あの日、一気に21人もの被害者が出た。静子の思惑通り、世間は大騒ぎしたが、捜査がどのように進んでいるのかも報道されないということは、マスコミに対してかん口令でもしかれているのかもしれない。今回の事件は続かなかったので、世間の騒ぎはすぐにおさまったが、静子はおおいに満足していた。事件が起きてからというもの、まるで自分がこの世界を支配しているかのような気分だった。

静子は、この計画を思いついたときのように、とっておきのロイヤルミルクティを飲み、達成感に浸っていた。

つけっぱなしだったテレビになんとなく目をやった時、自分の家が映っていることに気がついた。

――あらやだ。何かの撮影かしら。

そう思ってテレビの音量を大きくした途端、静子の耳に信じられない言葉が飛び込んできた。

「約1ヶ月前から始まった、針混入事件の容疑者が、遂に逮捕されようとしています！」

興奮しきった口調でレポーターがしゃべっている。

静子はパニックになり、床にはウェッジウッドのカップが飛び散った。もうレポーターの声は耳には入らない。どうしようかとウロウロしていると、インターホンがなり、玄関のドアが叩かれた。

何も知らない家政婦が、そそくさと玄関に向かう足音が聞こえた。

「開けちゃダメ！」

静子がリビングから飛び出した時、すでに2人の男が玄関に入ってきていた。

名前を確認し、逮捕状を見せる刑事たちの声が、頭の上を通り過ぎていく。

――本物の刑事も、ドラマと同じような格好をしているのね。

静子は、ぼんやりした頭の中で考えていた。

両脇から刑事に支えられて家の外に出ると、いっせいにフラッシュがたかれた。リポーターたちは、さっきよりもいっそう興奮している。その周りを囲むようにして、静子を一目見ようと野次馬たちがひしめきあっていた。

――まるでアイドルか何かね。

そう思った瞬間、静子は冷静になった。

――そう、私は皆に注目されるべき人なのよ。いつも家に閉じこもっているなんて、私には似合わないのよ。

静子は微笑みながら、まっすぐ前を見て歩いていった。

そこに、レポーターの声が聞こえてきた。

「少し笑っているようです！ これは一体、どういうことでしょうか！ こんな幸せを絵に描いたような家庭の主婦が、なぜこんなことをしたんでしょうか！」

静子は足を止めた。

カメラをまっすぐ見据え、静子は叫んだ。

「幸せなんかじゃない！ 私は……、私はカゴの中の鳥じゃない！」

(完 結)

カゴの中の鳥

<http://p.booklog.jp/book/42710>

著者 : nagomino-riko

著者プロフィール : <http://p.booklog.jp/users/nagomino-riko/profile>

感想はこちらのコメントへ

<http://p.booklog.jp/book/42710>

ブックログのpapier本棚へ入れる

<http://booklog.jp/puboo/book/42710>

電子書籍プラットフォーム : ブックログのpapier (<http://p.booklog.jp/>)

運営会社 : 株式会社paperboy&co.